

《京都》御所と離宮の栞(しおり)



其の十六

— 修学院離宮 —

華やかな飾金具



修学院離宮 中離宮の客殿

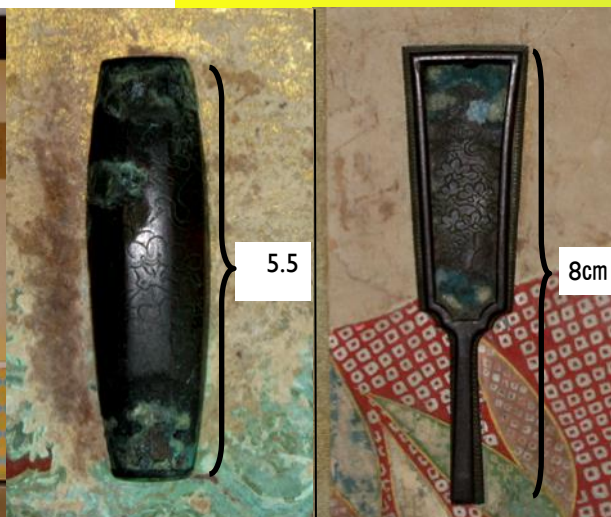


御所や離宮には、様々な意匠の金物があり、[栞其の八](#)では桂離宮の引き手を紹介しましたので、今回は修学院離宮にある引き手と釘隠を紹介します。

修学院離宮は、上離宮・中離宮・下離宮という三つの区画から成っており、今回紹介する金物は、中離宮のきやくてん客殿にあります。



客殿一の間の霞棚



引き手：ぶりぶり(子供の玩具)形と羽子板形 

中離宮は元々、後水尾上皇の皇女光子内親王のために設けられた山荘があった場所で、現在そこには客殿と楽只軒という建物があります。客殿は、東福門院の女院御所内にあった奥対面所を天和2年(1682)に移築し、それ以前からあった楽只軒と隣接し階段や縁で連絡しています。その一の間の霞棚([栞其の七](#)で紹介)には、ぶりぶり形(ぶりぶりは、棒材に車輪と紐をつけて引いて遊ぶ玩具で、一説に土をならす農耕具を真似たとされ、後に新年の祝儀物として扱われた。)のものや羽子板形の引き手があります。羽子板は地袋(棚の下部にある小襖・写真赤矢印)に、ぶりぶりはその上の三角の棚(地袋の上部の横長の小襖・写真青矢印)にあります。これらは七宝や彫刻が施された非常に繊細なものとなっています。



引き手: 菊花形七宝三つ葉葵紋



他に一の間には、左の写真にある引き手があります。外側に菊の意匠があり、内側には東福門院が徳川家から嫁いだことに関連し、三つ葉葵の意匠があります。

右の写真の引き手は、二の間の襖に用いられているもので、尾長鳥の意匠となっています。尾長鳥は、襖を開ける方に向いているため、場所によって鳥の向きが異なります。



引き手: 尾長鳥形



引き手: 七宝扇面形



次に、左側の写真にある引き手は、二の間のものです。扇の意匠で、扇面には花びらに七宝が施してあり、その^{かなめ}上に要で留めた3本の骨があります。右側の写真にある引き手は、一の間の北側にある内仏間のものです。^{しょう}四葉(四方に草花が広がる意匠)で、中央には、金地に雲を黒塗りで表現しています。



引き手: 四葉円形



下の写真は、客殿の長押にある釘を隠すために用いられる金具です。左側のものは、一の間にあるもので、車に花が盛られた花車です([葉其の十](#)で紹介)。右側のものは、二の間にあるもので、笹竹形の釘隠です。これも七宝が施されています。

中離宮客殿の金具は、七宝を施したり、吉祥を表す意匠や玩具など女性が好むような意匠が用いられ御殿を飾っています。それらは、江戸時代、宮中のみならず町人までにも服飾や芸術面で影響を与えたとされる東福門院使用の建物にふさわしいものになっています。



釘隠: 七宝花車形



釘隠: 七宝笹竹形

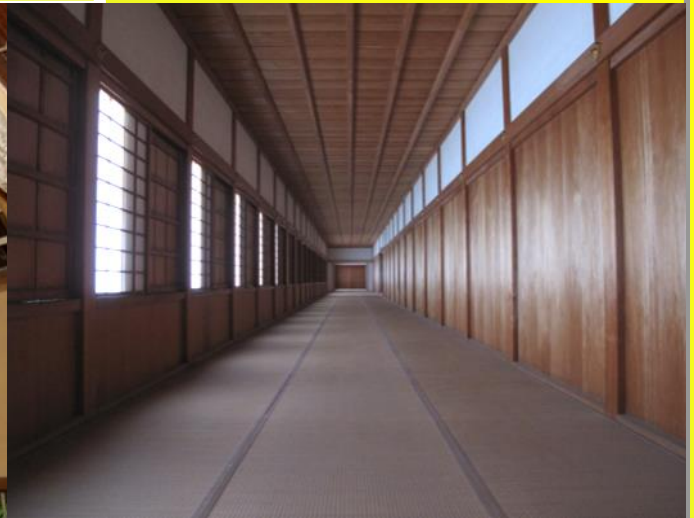


— 御 所 ・ 離 宮 —

天井



化粧屋根裏天井(桂離宮:賞花亭)
しょうかてい



竿縁天井(京都御所:非蔵人廊下)
ひくろうど



建物には、室内空間と屋根を支える骨組(小屋組)を仕切るため、天井が設けられています。ここでは、さまざまな工夫が施されている御所や離宮の天井について紹介します。

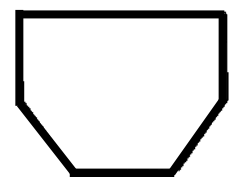
天井面が平らに張られた天井を総称して平天井といいます。そのほかに天井面が斜めになっている勾配天井、天井の断面が舟底を逆さにしたような舟底天井があります。また、屋根裏を意匠として、梁などの木材をそのまま見せている天井、もしくは勾配状に天井を張り、屋根裏のように見せている天井を、化粧屋根裏天井(写真:上段左)といいます。また、天井板を載せる材(縁)によって竿縁天井(写真:上段右)、平縁天井、猿頬天井(写真:下段)などの言い方があります。竿縁天井は、正方形ないし縦長の方形の材を等間隔にわたして、天井板を張るものです。竿縁の材が平たい(断面の形状が横長の方形)ものを平縁天井、竿縁材が面取りされて、断面が四角ではなく猿の頬のような形の縁材が用いられるものを猿頬天井といいます。京都御所では、臣下が使用する廊下に竿縁天井が用いられることが多く、猿頬天井は、御茶室、縁座敷などに用いられます。格式を重んじる京都御所では、場所により用いられる天井に違いがあるということをまず詳しく紹介します。



猿頬天井(京都御所:聴雪(上の間))
ちようせつ



猿頬(拡大)



猿頬(断面図)

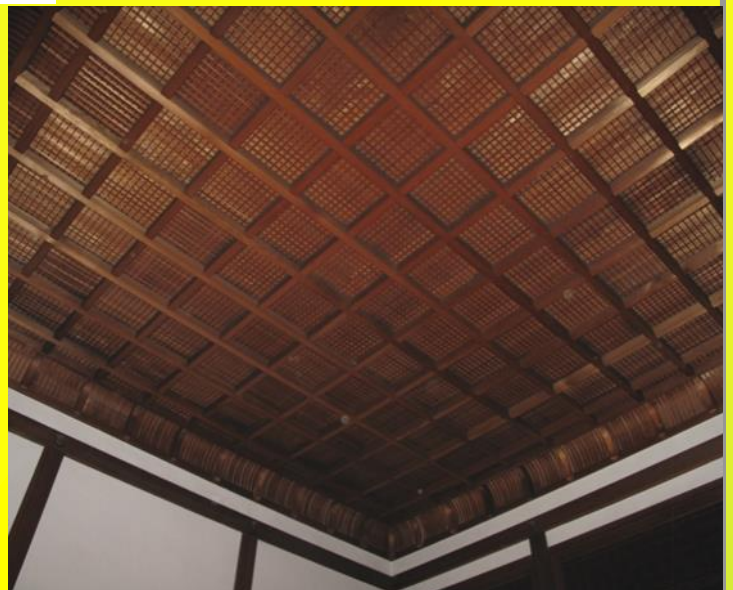


格天井(京都御所:御常御殿(一の間))

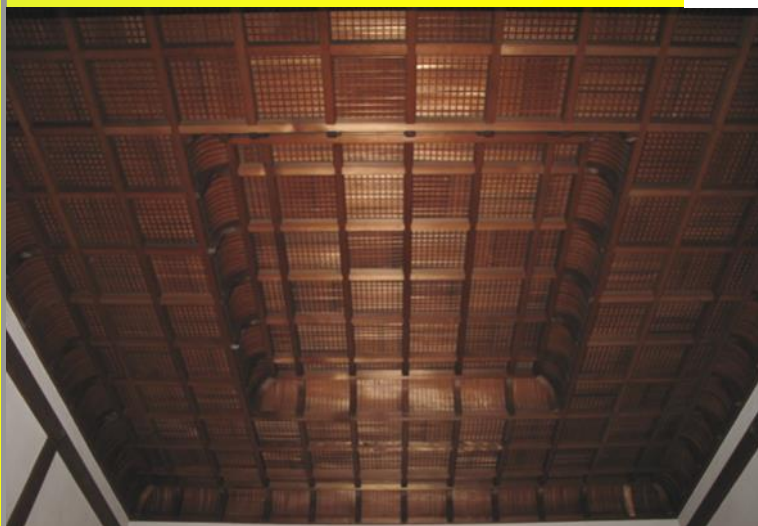


ぎよしん
御常御殿の御寝の間や一の間の天井は、格天井が用いられています(写真:上段)。格天井とは、
ごうてんじょう
格縁という
ごうぶち
角材を縦横(格子状)に組み、そこに天井板を張るもので、天皇御使用の奥向きの部屋に用いられた格式の高い天井です。この他、天皇と対面する者が使用する御学問所の中段・下段の間や小御所の下段の間などでも用いられています。

おりあげこぐみごうてんじょう
御常御殿と小御所の中段の間は、折上小組格天井が用いられています(写真:中段)。この天井は、天井の外周が
おりあげてんじょう
壁から湾曲して一段高くなっている「折上天井」の天井板面・格縁間に、さらに小型の格子を細かく組むものをいいます。臣下に入る部屋でも先述の格天井より格式が高く、また御学問所、御三間、参内殿など諸儀式の折に天皇の御座所となる各上段の間に用いられています。また、剣璽を奉安した「剣璽の間(御常御殿)」や大正天皇の即位式で御鏡を奉安するため大正4年(1915)に建てられた春興殿の内々陣にも用いられています。



折上小組格天井(京都御所:御常御殿(中段の間))



二重折上小組格天井(京都御所:御常御殿(上段の間))

にじゅうおりあげこぐみ
御常御殿と小御所の各上段の間は、二重折上小組格天井が用いられています(写真:下段)。この天井は、折上小組格天井の中央部分がさらに一段高くなっているものをいいます。天皇が正式に対面をおこなう場合に御座所として使用される部屋に用いられています。

主な部屋の天井一覧表

	上段の間	中段の間	下段の間
御常御殿	二重折上小組格天井	折上小組格天井	化粧屋根裏天井
小御所	二重折上小組格天井	折上小組格天井	格天井
御学問所	折上小組格天井	格天井	格天井
皇后宮御常御殿	折上小組格天井	格天井	猿頬天井



化粧屋根裏天井(京都御所:紫宸殿)



また、元々平安宮内裏に建てられていた紫宸殿、清涼殿や飛香舎には化粧屋根裏天井が用いられています(写真:左)。これらの建物は、天明8年(1788)の火災で焼失したため寛政度御造営時(1790年)に建物が再建される際、故実家などの考証を基に平安宮内裏の様式に復古されましたが、再び嘉永7年(1854)に焼失してしまいました。安政度御造営(1855年)も同様の形式で再建されたのが、現在の建物です。梁が非常に太いこともあり重厚な感じがあります。

以上のように、京都御所にある御殿の天井の様式は、復古により平安宮内裏の宮殿建築を用いた様式と、江戸時代までに発達した様式が混在しています。いろいろな時代の様式が見られる貴重な建物群といえます。



網代天井(仙洞御所:醒花亭(書院))



網代天井(修学院離宮:隣雲亭(廊下))



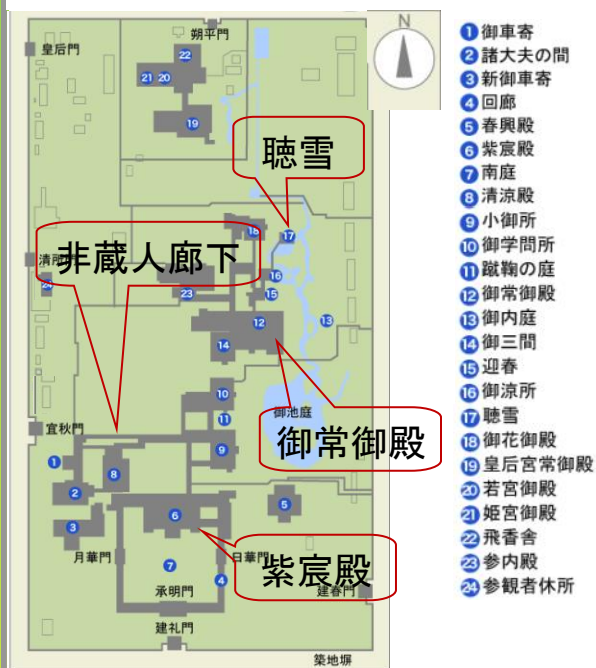
これまで見てきた天井の他に、仙洞御所、桂離宮や修学院離宮には網代天井と言うものがあります。網代天井は、主に茶室で使われ、葦、竹、杉・檜などの薄板を斜めもしくは縦横に編んだ網代を用いたものです。仙洞御所の醒花亭(葉其の三で紹介)、桂離宮の笑意軒や修学院離宮の隣雲亭(葉其の六で紹介)で用いられています。網代を乗せる縁に竹が使用されたり、その縁の配置が場所により本数に違いがあったりするなど、細かい変化をつけた意匠となっています。



網代天井(桂離宮:笑意軒(一の間))



京都御所案内図



桂離宮案内図



仙洞御所案内図



修学院離宮案内図



④ マークは、御所・離宮の外側から、いつでもご覧になれます。

⑤ マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、[参観要領 - 京都御所 \(kunaicho.go.jp\)](http://kunaicho.go.jp) をご覧ください。

⑥ マークは、通常公開していない場所にあります。

※京都御所は事前申込不要の通年公開となりました。京都御所で参観経路からご覧になれるところは、次号以降で⑥マークを使用します。詳細については、[参観要領 - 京都御所 \(kunaicho.go.jp\)](http://kunaicho.go.jp) をご覧ください。

また、[仙洞御所](#)、[桂離宮](#)、[修学院離宮](#)では、事前申込以外に当日受付もおこなっています。

これまで掲載した「《京都》御所と離宮の葉」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑 3

宮内庁京都事務所 代表電話：075-211-1211

其の十六：平成29年1月24日発行